

2013年8月13日(火)



「報告」 7.27 今中哲二さんの講演を聴いて

放射能汚染とどう向き合うか—被曝について分かっていることとよく分からないこと—

7月27日、「終焉に向かう原子力」実行委員会が企画した講演会に参加しました。「食べる会」の会員や生産者もたくさん参加され、嬉しいビックリ、でした。

1) 最初と最後に、今中哲二さんは事実認識の仕方として、次のように話されました。「科学とは疑うことだ。科学者は①《確かであるか科学的に推論できること》に言及できるだけだ。しかし、大部分の②《確かかどうか、はっきりしないこと》がスッポリ抜けてしまう。この領域には、ジャーナリストは自分の感覚できちんと取り上げるべきだし、行政は、人々の健康を守るという『予防原則』に基づいて取り組むべきである。」

2) 低線量被曝について。「急性被曝によるガン死については、誰もが認めるが、低線量被曝・長期被曝については、まだまだ分からない。人間のデータが必要だが、実験することはできない。そこで疫学データとして広島・長崎の例、医療被曝の例、放射能汚染・原子炉事故の例（チェルノブイリ、セラフィールド・ラアーグ周辺、核兵器工場、核実験場）などを用いて行なう。」そして、いろいろな仮説があるなかで今中さんは、広島・長崎被曝生存者追跡データをもとにした、被曝量とガン死の関係のグラフは直線になり、米国 BEIR-7 報告でも『発がんに関する線量・効果関係はしきい値なし直線』であり、放射線被曝に安全量は存在しないが世界でも常識だと言われました。そして100ミリシーベルト以下で安全、とする山下俊一教授などの説を批判しました。詳しくは、彼の著書「サイレント ウォー 見えない放射能とたたかう」（講談社）、「低線量放射線被曝 チェルノブイリから福島へ」（岩波書店）をぜひお読みください。

3) 被曝するとガンができる仕組みについて。DNAのハシゴが切られて、おおかたは修復するが、修復されなかったり、間違っって修復されたり。この辺は良く知られていると思うので、これくらいにします。

4) ガン以外の低レベル被曝影響について。いくつかの研究例をあげましたが、今中さんは、研究者としてかなり慎重な判断をなさいました。議論の方法に大変示唆に富んだお話でしたが、ここでは触れる余裕がありません。1987年（チェルノブイリの翌年）にドイツとベラルーシでダウン症が急増したことには注目されました。

5) 私たちは、汚染時代を迎えてしまったこと。

今中さんは、およそ次のように話されました。「自然放射能の影響を考慮するこ

とは必要だ。それに今度の事故でまき散らされた汚染が加わる。東京も汚染してしまった。福島はその10倍以上の汚染だ。私たちは、どこまでの被曝をガマンするのか。一般的な答えはない。「年1ミリシーベルト」がガマンを考える出発点だろう。子どもは感受性が大きく、将来がある。できるだけ少なくすべきである。」

そして最後に、「とにかく原発はやめにすべき」と結ばれました。

お話の1時間半は、あっという間にすぎました。

彼の、科学者としての慎重さ・冷静さ。私たちと同じ市民の目線で3.11以後をとらえる感性、とりわけ福島の人たちへの思い。そして「とにかく原発はやめるべき」という絶対に譲らない強い意志。あらためて共感した講演会でした。

続く質疑でも印象深い話題が出ました。2つだけ取り上げます。

Q①がれきの焼却にフィルターは本当に効果的なのか。

A フィルターは不十分だ、ということを経営に要求することは必要。だが、なぜ放射能を全国にばらまく必要があるのか。除染についても同じ。業者の利権の問題だ。

Q②今すぐ原発をやめるとアブナイ、という人がいるが・・・。

A 今すぐやめない方がずっとアブナイ。核のゴミも増え続ける。今すぐやめたらアブナイと思うのは電力会社だけだ。それは彼らだけの問題だ。

今中さんは、「原子カムラ」と同じ意味で「除染ムラ」と表現しています。巨大な利権構造によって、何千億ものカネがムダな「除染」につき込まれる。本来なら、帰れない人々が新しい生活を再建するために回すべきカネなのに。そう飯館村前田地区の区長さんである長谷川健一さんは苦悩をにじませて言っています（ドキュメンタリー「飯館村」(土井敏邦監督)、「原発に『ふるさと』を奪われて」(長谷川健一著 宝島社))。

ふるさとに帰りたい、でも帰れない15万人もの人たちの気持ちを、私たちは忘れてはいけないと思います。特定避難勧奨地点が解除され、その3か月後には賠償が打ち切られました。国と県は避難者を汚染が続くふるさとに帰そうという方針です。なぜ、こんなにも人々が生活を壊され、犠牲にならなければいけないのでしょうか。福島で起こったこと、いまだに続いていることを世間から忘れ去らせようとするのが、再稼働させたい人たち、原発を輸出したい人たちの狙いです。それに抗して福島を語り続けることが、私たちができることの最初の1つではないでしょうか。前述の長谷川健一さんは、県と県立医科大学が実施する健康調査に「私は山下俊一の本モットにならない！」と大書きしました。

この日、講演会でお会いした方々とおしゃべりできるチャンスを逃したことを後悔していたので、事務局から「報告」を書け、と言われて、がんばって書きました。

もっともっと話し合う場がほしいですね。

古荘斗糸子 (三多摩木 もぐさAポスト)

この講演会はプロジェクトニュース N015 と「食べる会しんぶん」146 号でお知らせをし、会員 9 人、三芳から生産者 2 人が参加しました。

7.27 今中哲二さんの講演を聴いて——参加者の感想

◆過去の事象（チェルノブイリ放射能事故、広島・長崎の原爆）のデータと比較しながら、今回の大震災の状況について解説していただきました。

その中で、チェルノブイリ事故と比べ、今回の福島事故に関する情報があまりにも少ないのには驚きました。東京電力と政府は今回の事故を隠蔽し、まるで何もなかったかのように消し去ろうとしています。福島原発は収束もしていない上、今も高濃度汚染水を垂れ流し続け、また被災者の健康状態もろくに検査していません。このままでは、今後、事故と病気の関連性を調べようとしても不可能です。これが、過去に原爆を落とされた国のする事でしょうか。チェルノブイリと比較すると、多分今回は事故の被害は少なく済むと思います。だからこそ、低線量被曝に関するデータをしっかりと収集し、今後のために生かすべきです。今中先生より、「人間が被曝した時のリスクは動物実験ではわからない」と話がありました。

放射線汚染物質は、移動しても、埋めてもなくなりません。ただ半減期を待つしかないのです。そういう物質を使い続ける事の怖さ。また最終処分場も決められず、またその経費も棚上げしたまま、目先の運転のための経費の安さを強調し再稼働をしようとする東京電力。原発の技術を海外に売りつけようとする政府。本当に信じられません。

日本人にとって福島の事故は過去の記憶になりつつあります。様々な情報がとびかう現在、それらの情報にまどわされる事なく、欲しい情報だけをしっかりと集め、今後の東京電力と政府の動きに注目していきたいと思います。

また、今中先生には震災直後の放射能測定の際に大変お世話になりました。今回直接お会いして、そのお礼を申し上げる事ができよかったです。今中先生は震災後、汚染除去が充分でない頃から被災地に何度も足を運んでおり一般の人より多く放射線を浴びておられます。先生の今後のご健康、また今後のご活躍をお祈り申し上げます。

八代弘樹（三芳村生産グループ 56 番）

◆8月6日の新聞には広島原爆の新たな資料が報道されていたが、今中先生の講演をうかがったあとなので理解しやすかった。福島の被爆から2年5か月、原発の再稼働が本格化しそうな状況のなかで、先生のお話は具体的な数値やグラフをあげられていて放射能を正しくおそれなければいけないのだということがよくわかった。

汚染水が海に垂れ流されても、核燃料の再処理ができない現状でも、原発を強引に推進しようとする自民党政権の意図はどこにあるのか。福島の東側が住めない状態になっているのに、避難するとき死者がでていのに、原発事故の死者はいないなどという政権には不信感以外の何物も感じられない。

私たちは一生物として地球上に生かしてもらっているのだという意識を忘れず、次世代に核のゴミを残さないためにも、一刻も早く再生可能エネルギーを推進してほしい。

講演会会場で購入した「サイレントウォー」の購読を科学に弱いと思っている会

員におすすめしたい。

微量とはいか程のものかいつにても漏れたるとき彼らの言葉

いつ爆ぜむ青白き光を深く秘め原子炉六基白亜の列なる

この2首は2004年に発行された「青白き光」という大熊町在住の佐藤祐禎さんの歌集にあった。あの日の10年以上も前から、原発関係者に死者が出て、安全性には疑問があったことを知らなかった。 谷萩礼子（都心 文京ポスト）

◆今中さんが全国38箇所を測定されたデータによりますと神奈川、東京、千葉（ホットスポット）ではセシウム137により1平方メートル約1500~40000ベクレル、空間放射能線量率1時間あたり約0.05~0.3マイクロシーベルト汚染されています。セシウム137の汚染は減少しながらも100年以上放射能汚染を続けます。低線量被爆でも比例関係があり、量が増すほど影響が増えるという講演でした。しかし、これは外部被曝の値です。飲み物や食べ物による内部被曝がありますので、これを少なくする努力をしなければいけないと思いました。

仙洞田洋子（千葉 海津ポスト）

◆今中先生は三芳の畑や野菜の放射能のことをご相談した方です。お米の測定をお願いした時「測定したら数値は出ますよ。」といわれある程度覚悟はしていたが、結果はごく微量で、みんなで胸をなでおろし、安心したことはご承知の通りです。

講演を聞いて。平和利用と銘うっての核分裂エネルギー利用（原発）は断じてやめなければいけないと言うことである。原発が稼働すると炉心には核分裂生成物（いわゆる死の灰）が蓄積されていくこの膨大な量の放射能をいかに完全に閉じ込められるかに技術の課題があるということ。

チェルノブイリの事故後、何度も現地に行き、事故とはどのようなものであったか追跡を続けてこられ、「放射能汚染や被曝影響もさることながら、大きな事故が起きれば、チェルノブイリと同じように、あっという間に周囲の村や町が無くなり地域社会が消滅する」というもの凄さであったようです。

「へたをすると、日本でもチェルノブイリのようなことが起きる可能性がありますよ。」と言っていけばよかった。と 大西道子（城南 代官ポスト）

◆今中さんのお話は予備知識のない私には難しすぎましたが、いくつか気になったことがありました。

放射能を一度にたくさん浴びると遺伝子を傷つけ“急性障害”（確定的影響）がおきる。しかし被ばくが少なくても、ガン・白血病といった“晩発障害”（確率的影響）の恐れがあるという。チェルノブイリでも0から14歳で被ばくした子供たちは後年、甲状腺ガンの多大な発生が見られる。しかも遠く離れたスウェーデンでもセシウム137の汚染地域でガンの増加が見られるという報告があったという。

関東周辺にまで及んだ汚染のホットスポットを考える時、福島の子どもたちは勿論のこと、他の地域でも定期的に健康診断を行い、健康被害のケアを法律で制度化すべきではないかと思う。子どもたちの健康を追跡調査するシステムの一日も早い実現を望みます。 金成ハツエ（三多摩火 田無東ポスト）